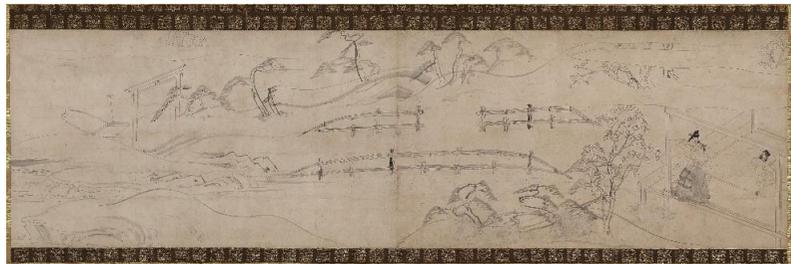
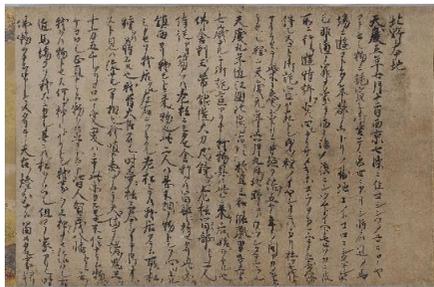


## 【京都国立博物館】（8件）

< 絵画 >（3件）

1 名称	重要美術品 北野本地絵巻断簡 (きたのほんじえまきだんかん)	品 質	(1巻) 紙本墨書 (1幅) 紙本白描
作者等		員 数	1巻・1幅
時 代	鎌倉時代 13世紀	寸 法 等	(1巻) 縦28.3cm 横42.2cm 総長(見返・軸付含む) 91.4cm (1幅) 縦28.4cm 横100.7cm
作品概要	<p>北野天神縁起絵巻の断簡。もと三巻本の巻下にあたると思われる一巻(詞・絵各十段)が伝来し、重要美術品に指定されていたが、戦後に分割され、現在では海外を含む各所で所蔵されている。そのうち、本作品は冒頭に位置していた詞書(卷子装)と、絵(掛軸装)にあたる。詞書の内容は、天慶五年(九四二)賤女の綾子に天神が右近馬場に社を造るよう告げたいわゆる「綾子託宣」と、天慶九年(九四六)に近江国の神官・神良種の子である太郎丸に天神が右近馬場に松を植え法華三昧堂を建立するよう命じた「太郎丸託宣」。詞書の冒頭に「北野本地」という内題が記されており、作品名はこれによる。絵は「太郎丸託宣」の部分で、画面右に僧侶と俗人男性が太郎丸から託宣を受ける場面を配し、中央に松の群生する右近馬場の塚(柵)を描く。なお、分割前は錯簡によって「綾子託宣」の絵がこの後に続いて配置されていた。絵は白描で、二紙分の横長の画面にたいへん伸びやかな墨線で広々とした景観を表し、人物や花・葉など細部も的確な画技をみせる。こうした白描の高い完成度や、片仮名書きの詞書の書風から、十三世紀後半～末期の作と考えられる。</p> <p>北野天満宮のある京都に位置する当館だが、北野天神縁起の所蔵品はない。鎌倉時代の北野天神縁起絵巻の重要作例として調査研究への活用のほか、社寺縁起や白描の特集展示に役立つことが期待される。また、前述したとおり他の断簡は海外に流出しているものもあり、同様の事態を防ぐ意味でも早期に購入すべき作品だと考える。なお、現状一巻と一幅は別々の二重箱に納められているが、卷子の内箱や表装は分割前のものを引き継いでいるとみられ、その点でも重要である。上田庵壺旧蔵。掛幅の箱書は安田鞞彦による。卷子の箱書によれば伝藤原為家筆。</p>		
購入金額	66,000,000円		



2 名称	重要美術品 住吉真景図巻(すみよししんけいずかん)	品 質	紙本着色
作者等	岡田半江筆	員 数	2巻
時 代	江戸時代 天保12年(1841)	寸 法 等	上巻 24.0×782.7cm、下巻 24.0×720.5cm
作品概要	<p>岡田半江(1782~1846)は、江戸時代後期に大坂で活動した南画家。上野理一旧蔵品として早くから知られる本作は、住吉社の境内とそこに生えるクスノキなどの樹木を、卷子二巻にわたり描き連ねた作品である。巻頭に見える参道の賑わいに続き、太鼓橋を経て第三本宮・第一本宮、さらに正印殿・神宮寺・大海神社などの建物が描かれ、神域を彩る新緑の木々がリズムミカルな筆のタッチとみずみずしい色彩によって表現されている。父に学びながらも、米山人とは異なる繊細な筆遣いと清澄な色彩感覚が特徴で、印象派を思わせるような光や大気の表現が魅力的な作品である。半江晩年の代表的作品であり、江戸時代の真景図としても屈指の名品と言える。</p> <p>同年の作に重文「春露起鴉図」(遠山記念館蔵)がある。本作はこれと双璧をなす半江の代表作であり、江戸時代後期の南画の魅力と重要性を雄弁に物語る作品である。京都に所在する博物館として、大坂を含む関西の南画に目配りすることは重要な責務だが、当館にはこの分野の作品がほとんど収蔵されていない。その欠を埋めることは勿論、当館館蔵品を代表する一点となることは疑いなく、今後の展示活用も大いに見込まれる。</p>		
購入金額	88,000,000円		



3 名称	吉野・龍田図屏風(よしの・たつたずびょうぶ)	品 質	紙本着色
作者等	英一蝶筆	員 数	6曲1双
時 代	江戸時代 17世紀	寸 法 等	各148.4×352.2cm
作品概要	<p>英一蝶(1652~1724)は、江戸時代中期に江戸で活躍した狩野派画家。本作は、古来歌枕として名高い奈良の吉野と龍田を、春秋に描き分けた屏風である。それぞれ、金峯山寺蔵王堂と龍田大社を中心としながら周辺の名所旧跡を数多く描き込み、さらに参詣に訪れた人々や周辺住民の日常生活をも含み込んだ豊かな絵画世界が展開されている。吉野と龍田は名所絵としてさかんに描かれてきたが、その多くは桜と吉野川・紅葉と龍田川のみをモチーフとする象徴的な風景表現であり、このような豊富な風俗表現を伴う作品は珍しい。</p> <p>『徳川実紀』には、元禄7年(1694)、桂昌院が本願寺門跡らに「多賀蝶湖筆吉野龍田図屏風」などを贈ったという記事があるが、本作はここに記される屏風に該当する可能性がある。これだけの力作でありながら署名はなく、印章が捺されるのみであるという落款の形式や、この時代としては大きな紙の使用も、特別な制作事情をうかがわせる。現存する一蝶作品のなかでも群を抜いて質の高い作品であり、将来的な展覧会での活用も大いに見込まれる。</p>		
購入金額	110,000,000円		



<金工> (1件)

4 名称	太刀 銘(菊紋)和泉守来金道ノ遥奉 鈞命享保庚戌年於京師二柄ヲ打一柄ハ獻シ一柄ハ則是也 (たち めい(きくもん)いずみのかみらいかねみちノようほう きんめいきょうほうかのえいぬのとしけいしにおいてふたえをうちひとえはけんじひとえはすなわちこれなり)	品 質	鉄製 鍛造
作者等	和泉守来金道	員 数	1口
時 代	江戸時代 享保十五年(1730)	寸 法 等	刃長 76.0cm 反り0.9cm
作品概要	近世の山城鍛冶を代表する三品派・和泉守来金道(五代)の手による太刀。本品は、江戸幕府八代将軍・徳川吉宗(1684~1751)の命により製作された献上刀の影打(予備)である。現在では献上分は失われており本品のみが現存することから、和泉守来金道の業績を証明する上でも非常に重要である。刀身は健全で反りが浅く、刃長は長めだが全体のバランスに優れ、優美な刀姿を呈する。刃文はやや箱がかつた互の目が主体で、匂口は締まって冴えがある。総じて江戸時代の三品派の典型的な作行を示しており、五代目・和泉守来金道の代表作と言って過言ではない。		
購入金額	2,500,000円		



<陶磁> (1件)

5 名称	褐釉撫四方茶入 野々村仁清作 (かつゆうなでよほうちやいれ ののむらにんせいさく)	品 質	施釉陶器
作者等	野々村仁清作	員 数	1口
時 代	江戸時代 17世紀	寸 法 等	高9.7cm 口径3.2cm 胴径4.4cm 底径3.0cm
作品概要	野々村仁清は、巧みな轆轤の技術を活かし、茶入、茶壺、水指、茶碗、香炉、香合など、茶道具を中心とした洒落た作品を数多く作り出した京焼の陶工である。仁清は、錆絵、染付を施したものや鮮やかな色彩の上絵付けを施した色絵陶器なども知られており、茶壺をはじめとして、蒔絵の技法や狩野派や土佐派の画風取り入れ、金銀彩を用いた優美な作風で知られている。 本作は轆轤で円筒形に挽いた後、胴部の四方を押さえて成形し、各面を面取りして仕上げた茶入である。室町時代後期から江戸前期頃までの茶会記を記した『松屋会記』の慶安元年(正保5年・1648)3月25日条、金森宗和の茶会で用いられた茶入について次のような記載がある。「宗和切形トテ、トウ四方也、シマノ袋[茶弁當ニ入レル為ト云ヘリ、仁和寺やきと也、]」とあり、「宗和切形」つまり宗和の見本に基づいて御室焼の「トウ四方」茶入が作られたことがわかる。本作のような四方茶入などから、「トウ四方」は胴四方のことと考えられ、宗和が茶会で用いた茶入が本作のような形状のものだと推測される。 宗和は、仁清が知遇を受けて様々と指導を受けていた人物で、その優美な茶風は公家たちにも好まれていたのであり、本作の独創的な器形は江戸時代前期の好みや茶風を知る上でも極めて重要な作品といえる。京焼における技法を考える上でも重要な作品であり、当館の館藏品としてふさわしい逸品である。 当館は京都の地に所在しており、御室焼を含めた京焼の研究を進め、そうした成果を展示等にも活かしていくことが必要である。そうした点からも本作は欠かすことのできない作品であり、京焼の基準的な作品ともいえる本作を所蔵し、展示、研究に広く活用していきたい。		
購入金額	16,500,000円		



<染織> (3件)

6 名称	白平絹地銀胴箔に草花描絵団扇形散らし文様摺箔 (しろへいけんじぎんどうはくにそうかかきえだんせんがたちらしもんようすりはく)	品 質	絹(平絹地・箔・描絵)
作者等		員 数	1領
時 代	江戸時代 19世紀	寸 法 等	丈144.0cm 裾67.0cm
作品概要	摺箔とは、能装束のうち、女役が内着として着用する装束である。そのため、壺折と呼ばれる特殊な着法をのぞき、着装時には襟回りから僅かにのぞく程度となる。表着ではないため過度に装飾されることは少なく、型紙を用いて糊を置き、金箔または銀箔を貼り付けた繰り返し文様とする作例が一般的である。しかしながらこの摺箔は、団扇形を残して地に銀を摺り詰め、七十以上にも及ぶ団扇形の中に墨絵と彩色絵を取り交えて四季折々の草花や蔬菜を描いた団扇形散らしの趣向をとる。団扇絵の中には似通った図様も見受けられるが、周到に布置されているため、それとは気付かない。摺箔には類例のない極めて凝った一領である。 このような摺箔を眺めることができるのは審美眼が高く財力をもった家と察せられるが、それを証するように、附属する独特の畳紙と貼紙から、本作は加賀藩前田家に伝来したことが判明する。前田家伝来能装束は、野村美術館や大倉記念館など各所に分蔵されており、製作年代や着用にあつた演目など様々な文字情報を記す畳紙が附属することで重要視されている。この摺箔にも「姥捨其外老女もの着付ノ求塚の坪折 隅田川着付など」との墨書があり、老女役の着付などに着装されたことがうかがわれる。		
購入金額	8,800,000円		



7 名称	白繻子地文字入花折枝文様繻帯 (しろしゅすじもじりいはなおりえだもんようぬいおび)	品 質	絹(繻子地・刺繻)
作者等		員 数	1筋
時 代	江戸時代 18世紀	寸 法 等	長335.0cm 幅16.5cm (総幅36.5cm)
作品概要	現在は仕立てを解かれた状態となっているが、本来は芯を入れて二つ折りにし、周囲を縫い閉じた帯であった。白繻子地に金糸と紫絹糸を交互に置いて、右から「音 羽 山 遅 桜 春 夏 相 坂 関」の文字が繻い取られる。これらの文字から、この帯は「音羽山 卯花かきにおそ桜 春と夏とやあふ坂の関」(『広本拾玉集』)の一首に取材しており、文字の下に繻い取られる花折枝は、文字では示されない卯の花と推測できる。 結び締めることで劣化が進む帯は、着物に比して現存作例が極めて少ない。現存遺品からも肖像画からも、桃山時代から江戸時代にかけて帯幅は次第に広がる傾向が指摘できるが、この帯は仕立て幅16.5cmと古様を示しており、18世紀の作例の可能性が高い。		
購入金額	3,300,000円		



8 名称	紫紵地花鳥虫籠文様繻振袖 (むらさきろじかちょうむしかごもんようぬいふりそで)	品 質	絹(紵地・刺繻)
作者等		員 数	1領
時 代	明治時代(19~20世紀)	寸 法 等	丈134.0cm 衿52.5cm 袖丈76.0cm
作品概要	京都国立博物館では、田村伎都子氏からの166点もの寄贈品を中心に、子どものきものが収蔵品の核のひとつとなっている。このたび購入した振袖は、田村伎都子コレクションでは作例の少ない公家女子の衣裳である。 中裁の単衣振袖で、鮮やかな紫縮緬地を背景に、上半身には夾竹桃に雀を、下半身には秋草に虫籠をすべて刺繻であらわしている。このような刺繻のみで文様を表現する小袖は、公家では御繻御召と呼ばれ、儀礼に着用する品とされる。生地は化学染料によるもので、明治時代には上流階級に好んで用いられた。 「花笠文様振袖」(1甲716)「破亀甲鶴梅折枝文様振袖」(1甲757)「縞に菊折枝文様振袖」(1甲758)と同じ伝来で、明治天皇の内親王所用と伝える。明治時代から戦前にかけて、旧華族制度の中で着用された公家小袖は、洋装の浸透と時を同じくしていることもあって洋装との使い分けなど詳細は明らかになっていない。宮廷文化に関わる作品は、京都に所在する当館の要であり、研究や展示のためにもぜひ収蔵品に加えるべき作例であると考え購入した。		
購入金額	1,650,000円		

